東方亜人伝

嵐川隼人

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

咲夜は、一人の堕天使と出会う。

その出会いが、幻想郷に大きな戦争を引き起こすとは知らずに・・・

これは、人を愛した堕天使が巻き起こす、幻想郷の物語である。

※暫く休載します。詳細については活動報告をご確認ください。

目次

一話 …… 1
二話 …… 11
三話 …… 19
四話 …… 26
五話 …… 35
六話 …… 43
七話 …… 49

一話

忘れ去られし者達が集まる世界、幻想郷
その世界には人間や妖精、妖怪、月の民、不老不死、神など様々な者たちが住んでいる
これはそんな世界で起こった大規模異変を記したものである。

〜人里・団子屋店内の入り口付近〜

赤いレンガと大きな時計台が目立つ大きな洋館〔紅魔館〕。その屋敷の主であるレミリア・スカーレットは誇り高き吸血鬼だ。かつて自分たち吸血鬼が行動できる範囲を増やすために、空を真っ赤な雲で覆った〔紅霧異変〕を起こしたこともある。無論幻想郷最強の巫女、博麗霊夢によって倒され、失敗したが。

しかし、それも昔の話。今はおとなしく自分の部屋で紅茶を飲んだり、異変解決者である霊夢が住む博麗神社に遊びに行ったりなど、静かにかつ楽しく暮らしている。

そんなある日、レミリアは自分の従者であるメイド長十六夜咲夜とともに、人里にある団子屋に来ていた。

咲夜は疑問に思っていた。

それもそのはず、レミリアが人里に来ることなど今までほとんどなかったからだ。それに人里に来るといっても大抵散歩で通るぐらいで、実質人里に来たことはない。そんな彼女が今日いきなり人里に用があると言い出したのだ。疑問になるのも当然だ。

咲「あの、お嬢様」
レ「わかってるわ。今日はある人達とここで待ち合わせしているのよ。」
咲「待ち合わせ、でございますか？」
レ「そうよ」
咲「はぁ……して、その方たちとお嬢様はどのような関係でいらっしゃるのですか？」

レ「そうねぇ……簡単に言えば、私の師匠ね」
咲「師匠？お嬢様には、師匠がおられたのですか？」
レ「ええ。まぁ詳しくは後でね。それよりも……来たみたいよ」

レミリアが店の入り口に目を向けると二人の男が入ってきた。
一人は背中を覆うほどに伸びた真紅の髪に青く透き通った瞳を持った高身長の男。
もう一人は紫に近い赤色の短髪で瞳が黄色く、眼鏡をかけた黒いコートの男。
そして二人とも、背中から黒い蝙蝠の羽を生やしていた。おそらくレミリアと同じ吸血鬼だろう。
レミリアの存在に気付いた二人は彼女に声をかけた。

？「よっ、レミリア。久しぶりだね。元気してた？」
レ「ええ、もちろん。そちらこそお元気そうで安心しました」
？「当たり前だ、元気じゃなかったらここには来ていないだろう」
？「いやいやいや、レミリアが聞いてるのはそういうことじゃないって！」
レ「フフフ、相変わらず仲がよろしいのですね」

出会ってまだ数秒ほどしかたっていない。しかし咲夜は彼らの会話の異常さに驚きを隠せないでいた。

咲（あのお嬢様が、敬語で話していらっしゃる☒この方たちは一体……）
？「……ん？レミリアの隣に立っている綺麗なメイドさんは誰？」
咲「申し遅れました、私紅魔館のメイド長を務めています、十六夜咲夜と申します」
レ「私の一番信頼できる従者なんです」
？「へぇ、咲夜ちゃんか。結構しっかりしてそうじゃん」

？「兄上、またナンパする気か？」
？「しないって！するわけない！っと、自己紹介がまだだったね」
キ「俺はキラ・グランドレッド。見ての通り吸血鬼さ。そんで眼鏡をかけているのが弟の」
レグ「レグルス・グランドレッドだ。よろしく頼む」
咲「キラ様とレグルス様でございますね。よろしくお願いいたします」
キ「もう、そんな堅くならなくっていいって」
レグ「いや、するのも当然だろう。彼女はレミリアの従者だ。そんな彼女の前で主がいきなり敬語で話し始めたんだ。俺達が相当格上の存在であるととみられてしまってもおかしくない。そうなんだろう？」
咲夜の心を読んだかのようにレグルスは淡々と述べた。それに完敗したように、咲夜は口を開いた。
咲「はい、その通りでございます」
レグ「やはりな。まぁ、先ほど兄上が言ったように、俺達に対しては無理に敬語を使う必要はないし、様付けをしなくてもいい」
キ「まぁ、そういうことだから、よろしく」
咲「は、はい。わかりました」
レ「フフフ・・・さて、ここで立ち話をするのもなんですし、奥へ入りましょう。席もとっているので」
キ「そうだね、そうしようか」
～団子屋・店内～
店員「お待たせいたしました。三色団子の盛り合わせと緑茶でございます。では、ごゆっくり」

そういって店員は、四人分の緑茶と三十本ほどの団子がのった皿を置いていった。咲夜は食べていいものかどうか不安だったが、レミリアは『せっかく来たんだもの、あなたも食べないと損よ』と言われ、一緒に食べることにした。

しばらくして、レミリアが口を開いた。

レ「さて……単刀直入に聞きますわ。重大な話、とは？」

レグ「あぁ、話というのは三つだ。まず一つ目、君と君の妹フランドールの序列昇格の件だ」

咲「序列？」

レグ「うん？あぁ、そうか。君は人間だったな。まずはそこからか」

そういうと、レグルスの隣に座っていたキラが立ち上がり、どこから持ってきたのだろうか、ホワイトボードに何かを書き始めた。

キ「それじゃ、咲夜ちゃん。君は〝亜人〟という言葉を知ってるかい？」

咲「は、はい。確かお嬢様やキラさんたちのような吸血鬼や妖怪など、人間に近い姿をした人間ではない存在、でございますね」

キ「その通り。亜人は人間みたいな姿をしているけど、人間とは違う何かを持っているんだ。例えば、僕たち吸血鬼には蝙蝠の羽があり、人間とは比にならないほどの力を持ってる。他にも鳥の羽を持つ天狗や角を生やした鬼、有名なところで言ったら天使や悪魔も亜人に当てはまるね」

レグ「兄上の説明に付け加えるなら、見た目が人間でも構成する細胞が異なる……いわば、改造人間や人造人間も亜人として扱われることもある」

咲「では、超能力を操れる人間の場合どうなるのですか？例えば……」

パチン、と咲夜が指を鳴らす。すると先ほどまで咲夜がいた場所には誰もおらず、瞬間移動でもしたかのように咲夜はキラが持っていたペンを手に何食わぬ顔で彼の隣に立っていた。

キ「……なるほど、時間関係の能力か」
咲「あら、もうお分かりになられたのですね」
キ「伊達にレミリアの師匠はやってないよ。
そうだね、確かに君のように不思議な能力を持っている人間だっている。けど、その人は基本人間として扱われるんだ」
咲「それは、どうしてでしょうか？」
キ「身体そのものは人間だからさ。さっきも言ってように、僕たち亜人は人間とは異なる体を持っている。超能力を持っているとはいえ、身体そのものが人間と同じものだったのなら、それは人間という種族内の超能力者、って区分される。だから、人間にはない能力を持っていたとしても、亜人とされるわけではないんだ」
咲「なるほど……つまり、亜人とは人間と異なる身体の構造を持つ、人間のような見た目の存在、ということでしょうか」
キ「まぁそうだね」
咲「亜人についてはよくわかりました。しかし、それがどう序列の話と繋がるのですか？」
キ「そう……そこなんだよ。咲夜ちゃん、君は考えたことはないかい？亜人の中で、どの種族が一番強く偉いのか、てね」
咲「そ、そんなの」

吸血鬼に決まっている、と言いかけたが、すぐに咲夜は思った。
彼女は吸血鬼であるお嬢様の従者。それ故今まで吸血鬼こそどの種族よりも強い存在であると信じて疑わなかった。
……博麗霊夢と、霧雨魔理沙が現れるまでは。
レミリアが吸血鬼の行動範囲を増やすために幻想郷で起こした紅霧異変、その異変解決者として咲夜の前に現れたのが、博麗霊夢。その時の咲夜は、時を操れる自分の能力を少々過信していた。自分がこ

んな紅白巫女に負けるはずがない。そう思って弾幕ごっこを行い……惨敗した。

彼女にはどうしても信じられなかった。おそらく自分が弱すぎたか、偶然霊夢が勝っただけだろう、そう自分に言い訳し、負けた彼女はレミリアのもとへ向かった。そこで彼女がみたのは、全力で戦うレミリアの弾幕をいともたやすく避け、圧倒する霊夢の姿だった。

結果はレミリアの惨敗だった。それでも咲夜は主の負けを認められなかった。レミリアの話で、博麗の巫女である博麗霊夢は幻想郷ではかなり強い存在であることは知っていたが、それでも吸血鬼が強い存在であるという考えは揺るがなかった。

しかし、そんな彼女の考えを変えた人物がいる。普通の魔法使い、霧雨魔理沙だ。

正直に言って、咲夜は魔理沙は霊夢ほど強くはないと思っていた。しかしそれは全くの見当違いだった。彼女はレミリアの妹であり、レミリア以上に戦いのセンスがあるフランドール・スカーレットと異変で対峙し、なんと勝利したのだ。

魔理沙を甘く見ていた咲夜は、自分の考えの甘さ、そして世界の広さを思い知らされた。

そんなこともあって、彼女はキラの質問に即答はしなかったのだ。

咲「……わかりません、ね」

キ「へぇ、意外。君なら吸血鬼だって即答すると思ったのに。でも、君の言ってることは正しい。

正直なとこ、僕たちでもどの種族が一番か、っていうのわからないんだよね」

レグ「俺が知ってる限りでも亜人には数百もの種族が存在している。そんな種族の中から、どの種族が一番か、なんて考えられるわけがない。というより、そんなことを自称する者たちが大勢いたらどうなると思う？」

咲「どうなるのですか？」

レ「戦争よ」

咲夜の質問に答えたのは、レミリアだった。レミリアは玉露を手に取り、水面を見つめながら話した。

レ「さっきレグルスさんも言ったように、亜人には数百もの種族が存在する。するとね、種族ごとに必ず一人はいるのよ、自分たちが一番だって思っている亜人が。そんな亜人が違う種族の亜人とぶつかってみなさい。最初はただの喧嘩で済むかもしれない。けれどその亜人を支持するものがだんだん増えて……しまいには種族同士の戦争に発展することになるの」

咲「種族同士の……戦争」

キ「そう。それを知った種族ごとの長達はある日会議を開いたんだ。戦争をなくすために亜人のトップを具体化させる必要があるってね」

レグ「だが、会議は最初から喧嘩が勃発。お互い自分が一番だと思ってるんだ、そもそも会議なんてしても意味はなかったんだ」

キ「そんな時さ。その会議に出席した精霊族の長についてきていた人がいてね、その人はその会議が何のために行われているのか全く知らなかったらしいんだ。それで彼女の付添人が事のあらましを説明したんだけど……そのあとなんて言ったと思う？」

咲「な、なんて言ったのですか？」

キ『『なんですか、それ。そんな幼稚なことで種族同士の喧嘩が始まるんですか？そんなに種族で喧嘩するのなら、いっそ全種族を亜人種という一つの種族と見立てて、種族ではなく亜人個人の序列を作ってしまえば簡単じゃないですか』……ってさ。そうして作られたのが、亜人種序列さ」

レグ「今回のレミリアの昇格の話というのは、その序列に関するも

の、ということだ。なんとなく理解できたか？」
咲「はい……なんとなく、ですが」
キ「ハハハ、まあより詳しくはまた今度話すよ。それじゃ改めて……
まずレミリア、君の序列は９８０位から５７０位に、そして君の妹フランドールの序列は１１９０位から６５０位に昇格したよ。おめでとう」
レ「ありがとうございます。しかし、私はそんなに昇格が上がるようなことは何も……」
レグ「レミリア、君はこの間博麗の巫女と戦ったそうだな。そしてフランドールはその親友である霧雨魔理沙と戦ったと聞いている」
キ「博麗の巫女とその魔理沙っていう人間は亜人種の中でもかなりの強者とされているんだ。そんな二人と戦ったとなれば、序列だって爆上げするさ」
咲「そんなにあの二人は有名なのですか？」
レグ「あぁ、なにせあいつのお気に入りだからな」
咲「あいつ……とは？」
キ「まぁ……そのうち会えるよ、能力的に」
咲「???」

とても気になるワードが出たが、気にしないことにする。咲夜はキラの話の続きを聞いた。

キ「さて……とりあえず昇格の話はここまで。二つ目の話……というよりは忠告かな」
レ「忠告？」
レグ「あぁ。実はな、最近序列上位者の襲撃事件が絶えないんだ」
咲「下剋上……というわけではないですか？」
レグ「そうだといいんだがな……ただこの襲撃事件にはある共通点があるんだ」

と、レグルスはホワイトボードに何かを書き始めた。刃が下向きの剣から悪魔の羽と天使の羽が生え、一番上にはにやりと笑うドクロマークのある不気味な模様だった。

レグ「襲撃したのは天使族、悪魔族、天狗族と種族はバラバラらしいが、襲われたものはみなこの謎のマークがあったと言っている」

咲「つまり、襲撃は何かの組織かそのあたりの者たちによるものだと」

キ「まぁそうだね、そして今レミリアとフランは上位になったことで襲われる可能性が高まったから気を付けてね、て話さ」

レ「わかりました。三つめは？」

キ「うーん、これも話というよりかはお願いなんだけど……二人は、棟谷（とうこく）蓮（れん）って知ってるかい？」

咲「棟谷蓮？」

レ「知ってます。確か、天使と悪魔の間の存在、堕天使族の有名ソロシンガーですよね。その人がどうされたのですか？」

レグ「一週間前から行方不明になっているんだ」

レグルスの言葉に二人は固まる。特に驚いたのはレミリアだった。

レ「え⊠あのと棟谷蓮がですか⊠彼は確か序列１８０位の超上位者だったはずですよね？」

レグ「そう、だからこそ謎なんだ。彼がそう簡単にやられるはずはないだろうが……」

キ「もしさ、君たちが彼を見かけたときは僕たちに連絡してほしいんだ。いいかな？」

レ「もちろんですよ。咲夜、あなたもいいわね」

咲「お嬢様がよろしいのでしたら」

キ「ありがとう！助かるよ。……さてと、今日話さなくちゃいけないのはこれぐらいだけど、今までの話になにか質問はあるかい？」

咲「あ、あの……棟谷蓮というお方は、どのようなお方なのです

か？」

キ「どのような方……か」

咲夜の質問に二人は難しい顔をした。質問してはいけないことだったのだろうか、そう咲夜が思っていると、レミリアが二人に代わって答えた。

レ「一言でいえば、優しい人よ」

咲「優しい……ですか？」

レ「そうよ。特に咲夜、あなたみたいな人間にはとても優しいわ。人間を愛しすぎた堕天使なんて異名もあるくらいだから」

咲「人間を愛しすぎた堕天使……でございますか」

どんな方か実際に会ってみたい、そう咲夜は思った。それが、もうすぐ現実になるとは知らずに……

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…

二話

レミリアの師匠、キラとレグルスの二人と出会ってから二週間がたったある日、咲夜は一人メイドの部下を連れて人里へ買い物に来ていた。

というのも昨日、レミリアから『明日キラさんが紅魔館に遊びに来るから、パーティーをするために色々食材とか買ってきて』と突然言われたからだ。咲夜は、来るのはいいがせめてもっと前に話してほしい、と思ったが、レミリア曰く『キラさんは有言実行するタイプの超気分屋なの。私自身明日来るなんてさっき言われたとこだし』とのこと。……お嬢様も大変なんだな。そう咲夜も思ったのだという。

あともう一つ部下を連れてきた理由として、紅魔館の食料が少なかったことも挙げられる。パーティー用の食材を含め、大量の食材を買う必要があるとなれば、さすがの咲夜もそれらを運ぶことは難しい。そのため、今回は彼女が一番信頼できる部下に手伝ってもらうことにしたのである。

咲「ごめんなさいね、休憩中にこんなこと頼んじゃって」

？「メイド長が謝ることなんてありませんよ！むしろ私なんかを頼ってくれたのが嬉しかったですし」

咲「フフフ、あなたって本当に真面目ね。あなたみたいな子がいてくれてうれしいわ、アスナ」

アスナ、と呼ばれた緑髪の少女は嬉しそうに笑顔で返事した。

アスナが紅魔館へ来たのは約三か月前、人手不足を補うために咲夜が求人ポスターを作ったのが始まりだった。ちなみにその内容は、

『紅魔館でメイド・執事としてはたらきませんか？

朝昼晩三食付き・有給あり・昇格あり・種族は問わない

初めての方でも大丈夫！』

と言ったもので、その翌日の朝紅魔館の前に彼女がポスターをもって立っていたのである。

最初はやはり妖精メイドがするような失敗も多く、ドジを踏むことも多かった。しかしその失敗を糧に日に日に上達していき、働き始めて一か月で咲夜の次に並ぶほどに腕を上げた。現在彼女は咲夜のメイド長代理として頑張っている。

咲「この仕事にそろそろ慣れてきたんじゃないかしら？」
ア「はい。これも、咲夜メイド長のおかげです」
咲「私、そんな凄いことしてないわよ」
ア「いえいえ、とんでもないですよ！咲夜メイド長は私にメイドとしての働き方を教えてくれましたし、私をメイド長代理にしてくださいましたし」
咲「後半はあなたの頑張りよ。失敗したことをメモして練習したりして上手になろうとした結果があなたをそうさせたのよ。もっと自分に自信を持ちなさい」
ア「は、はい！」
咲「いい返事、頼りにしてるわ。っと、人里に着いたわね。それじゃあここから分かれましょう。私はパーティー用の食材を買ってくるから、アスナはこのメモに書かれているのをお願いね。終わったらここに集合して」
ア「わかりました！では行ってきますね」

咲夜からメモを受け取ると、アスナはさっそく八百屋のところへと向かった。
ちゃんと行ったのを確認して、自分も買い物に向かおうとしたとき、人里であまり見かけない二人のフード男が目に入った。少し気になった彼女は、物陰に隠れて話を聞いた。

？「居たか？」
？「いや、居ない。そっちもか？」
？「あぁ。クソッ、どこに逃げやがった」
？「なぁ、どっかでもう死んでるんじゃないか？あいつは重傷を

負ってる筈だし、三週間も持つわけがない」
？「いや、もしかしたらどこかの家に身を隠しているのかもしれん。あいつはそういうことが得意だからな」
？「なるほどな。でもよ、どうしてあの方はあいつを捕らえろと言ったんだろな。あいつはあの方のなんなんだ？」
？「さぁな。ただ、これはあくまで噂なんだが、あいつには世界を支配できる力があるらしい。あの方はその力を強く求めているという話だ」
？「あいつにそんな力が？そうには全く見えないが」
？「俺も同感だ。だがあのお方の言葉に間違いはない」
？「だな。そんじゃ、お仕事再開しますか。俺は地上から探す。お前は空から探してくれ」
？「了解した」

返事と共に男の背中から何かが生える。茶色い翼だ。男は翼を広げ、天高く飛び上がった。もう片方の男はフードを深くかぶってその場を去った。二人がいなくなったのを確認した咲夜は姿を現した。

咲「あの二人……」

この時、咲夜は見ていた。二人の男の首筋に、キラが書いたあの不気味なマークがあったのを。おそらく序列上位者を中心に襲うという謎の集団の下っ端のような存在なのだろう。

咲「……お嬢様に知らせておきましょうか」

小さな声で呟いた後、咲夜もその場を去った。

ーーーーーーーーーーーーー

咲「とりあえず、こんなものかしら」

食材がパンパンに詰まった二つの手提げ袋を見て、咲夜はつぶやい

た。

咲「食材も買えたし、あとはワインかしらね」

食材の入った手提げ袋を肩にかけ、咲夜は酒屋へと向かう。その途中、彼女は先ほどの男たちの会話を思い出していた。

気になるワードは二つ。

一つは彼等が探しているらしい〝あいつ〟。彼等が重傷を負わせてまで捕らえようとするはおそらく、〝世界を支配する力〟というものだろう。いったいどのような力なのか皆目見当もつかないがら少なくとも彼等に渡ればお嬢様に危険が及ぶに違いない。それに、お嬢様の師匠が注意喚起するほどの奴等だ、なんとかしてその存在を先に捕らえるべきだろう。

そしてもう一つが、奴等が慕っている〝あの方〟だ。二人の会話から考えて、かなりカリスマ性の高い存在であるのは間違いない。でなければ、〝言葉に間違いはない〟という発言が出るはずがない。さらにもう一つ、そいつは例のあいつの力を求めているという噂。もしそれが本当だとすれば、なおさらあいつを捕らえさせる訳にはいかないだろう。

しかし、だとすればどうやって探せばいいのだろうか。今現在わかっていることは、その存在は恐ろしい力を持っており、今現在重傷を負っているらしい。そしてそれは三週間前から逃走しているらしく……

咲「三週間？」

ふと、咲夜は三週間という言葉に引っ掛かりを感じた。そして、あることに気づく。

二週間前にキラとレグルスが言っていた、棟谷蓮という堕天使の話だ。その時彼等は、蓮は一週間前から行方不明になっていると言った。とすれば、今現在から三週間前に蓮は行方不明になっていること

になる。それはつまり、あのフード共が探している存在を探し始めた時期と完全に一致する。これは偶然なのだろうか。それとも……

考えている間に彼女は酒屋に着いた。これ以上は帰ってからにしよう、そう思って彼女が店に入ると、一人の見慣れた紅白が誰かと話しているのが目に入った。

咲「あら、霊夢じゃない」

霊「咲夜？こんなところで会うなんてね。何してるの？」

咲「私は明日紅魔館に来られるお嬢様のお師匠さまを迎えるパーティーに向けて食材を買っているところなの」

霊「師匠？あいつに師匠なんていたのね」

咲「私も二週間前に初めて会ったのだけれどね。そういう霊夢は？」

霊「私はこっちに立ってる人と話をする為に来てるの」

霊夢が指差す相手の姿を見て、咲夜は目を見開いた。

とても綺麗な女性だった。

薄く青みがかったショートヘアーに端正な顔つき、肌は雪よりも真っ白で、高貴そうな服を着ている。身長は自分と同じぐらいで、瞳が青く透き通っている。その姿はまるで、綺麗を具現化したかのようだ。

少し見とれている咲夜に、その女性は話しかけた。

シ「初めまして。私はシエラ・リルダヴァルと申します。貴方が、十六夜咲夜さんですね？」

咲「は、はい。なぜ私の名を？」

シ「霊夢さんからお話はお伺いしております。なんでも、レミリア・スカーレットさんの下で働く完璧なメイド長だと」

咲「は、はぁ。ありがとうございます」

霊「シエラさんは先代博麗の巫女、つまり私のお母さんの親友なの」

咲「へぇ、清香さんの」

霊夢が言う先代博麗の巫女、博麗清香。拳での戦闘で一度も負けたことがないと言う、歴代の博麗の巫女の中で最強とされる三人の一人だ。今はその役目を娘の霊夢に任せ、一人外の世界に旅行に行っている。その際一度だけ咲夜は彼女と会ったことがあった。ちなみにあと二人とは、博麗大結界を張った張本人である初代博麗の巫女と、霊力の多さでは歴代一とされる現博麗の巫女こと霊夢である。

咲「それにしても、あの霊夢がさん付けして話すなんて違和感あるわね」

霊「失礼ね。私だって公私のわきまえぐらいわかってるわよ」

咲「どの口が言ってるのかしら」

霊「あんたまた異変の時のようにボコボコにしてあげましょうか？」

咲「ちょうどいいわ。ここであの時のリベンジを果たしてあげる」

シ「まぁまぁ、お二人共落ち着いてくださいよ」

霊夢と咲夜の喧嘩が今にも始まりそうなのをシエラが止めようとしたその時、酒屋の暖簾から何かが現れた。暖簾の方を向いていたシエラがそれにいち早く気づき、声を失った。シエラの異変を見た二人も暖簾に振り向くと、

霊「なっ☒」

咲「えっ☒」

黒い翼を生やした全身が血だらけの青年が、立つのもやっとな状態でそこにいた。腹部には槍の先が貫かれており、尋常じゃないぐらいの重傷を負っていた。

すると三人に気づいた青年は口を開き、

？「博麗の……巫女に……伝えて、くれ……もうすぐ、戦争

が……ここで…起き、る……っ」

目の前にいるのが博麗の巫女であることにさえ気がつかないほど意識が朦朧とした状態でそう言い、青年は力尽きたようにその場で倒れた。

心配になって近づこうとするシエラを止め、霊夢は青年に手をかざした。

霊「……大丈夫、まだ息はある。でもすぐに傷を直す必要があるわ」

咲「だけどどうするの？ここからだとあなたの神社も、お嬢様の紅魔館も遠すぎるわ」

？「おい、姉ちゃんたち」

青年を囲む二人に声をかけたのは、この店の店長と思われるおじさんだった。おじさんは二人に、店の空き部屋を使うように提案してくれた。

店「なんかよくわからんことになっとるけど、とりあえずその兄ちゃんすぐに手当てしないとやばいんだろ？ならうちの二階の空き部屋を使ってくれや。薬とか必要だったら言ってくれ。医者やってる女房に用意させるから」

霊「ありがとう、おじさん。それじゃ運ぶの手伝って」

霊夢は店長と一緒に青年を二階まで運んだ。自分も向かおうとした時、シエラが何かを言っているのに気がついた。

シ「まさか……ここにいたなんて……」

咲「シエラさん？」

シ「でも……よかった……まだ生きてくれてて……」

咲「シエラさん？どうし」

シ「見つかってよかった……棟谷、蓮！」

咲「えっ……」

思わぬ形で、咲夜は彼と出会った。

To Be continued…

三話

酒屋に突然現れた傷だらけの青年、棟谷蓮を霊夢が治療し始めてから３０分、彼を運んだ空き部屋から霊夢が出てきた。

霊「とりあえず何とかなったわ。後は彼が目覚めるのを待つだけ」

部屋でぐっすり眠る彼を見て、二人は安心する。それと、と霊夢は懐から彼の腹部に刺さっていた槍の先端を取り出した。その槍はかなりうねっており、一目見ただけで刺されば致命傷になる形だと判断できる形状をしていた。

霊「彼に刺さってたこの槍なんだけど……何か不自然に思わない？」

言われてみれば確かに不自然だと彼女たちは思った。

彼に刺さっていたはずの槍には、血が一切ついていなかった。霊夢が拭いたのかと聞くと、違うと彼女は答える。

霊「抜いた瞬間は血はついていたのだけど、すぐに消えたのよ。まるで、槍が血を吸い取ったようにね」

シ「血を吸い取った？……その槍、少し見せてもらえませんか？」

霊「いいわよ」

霊夢から槍を受け取ると、シエラは一人ぶつぶつと呪文を唱えるようにつぶやき始めた。そんな彼女をよそに、霊夢は青年を見て呆れたような声を出した。

霊「それにしても、あの状態でよく生き延びれたわね、あいつ。驚きを通り越して呆れたわ」

咲「生き延びれた……って、どういうこと？」

霊「そのままの意味よ。あいつ、少なくともけがを負ってから三週間はあの状態だったと思うわ。服についていた血は完全に固まって変色してたし、あいつから感じれる妖力や霊力も底を尽きかけてた。今までいろんな妖怪を見てきたけど、あんな生命力の高い妖怪は初めてよ」

咲「三週間……」

彼が行方不明になった時期とほぼ一致する。さらに、さっきのフード男達が誰かを捜し始めた時期とも一致する。そして男たちが捜している存在は、三週間前に傷を負わせられているという。

付け加えて言うならば、二週間前にキラが言った『彼を保護してやってほしい』という言葉からも、彼は何者かに狙われているということが推測できる。

これらのことから、あのフード男達が捜している存在は棟谷蓮であることがほぼ確定する。とすれば、あのフード男達が言った、〝世界を支配する〟力を彼は持っているということになる。ただこれはあくまで噂らしいので、本当かどうかは定かではないが。

どちらにせよ、彼をあいつらに捕えさせるわけにはいかないという結論に達したところで、シエラが戻ってきた。

シ「この槍を少し調べてみました。これはおそらく、吸血槍というものではないかと」

霊「吸血槍？なに、そのだっさい名前」

咲「そこじゃないでしょ。それで、どういう槍なんですか？」

シ「吸血槍とは、簡単に言えば槍型の吸血鬼です。この槍は刃こぼれした部分を血で再生するという特殊な能力がありまして、刺さっている間ずっと血を吸い続けるんです」

霊「名前のまんまの能力ね」

シ「はい。ですがこの槍はあまりにも危険な代物であるため、一部の亜人にしか使用が許可されていないんです。それも、死神のような〝死〟を取り扱う種族にしか」

咲「……つまり、彼をあそこまで傷つけたのは、死神族の誰か、ってことになりますね」
シ「その通りです。ただ、この槍が誰の持ち物かは現段階ではわかりません。なので霊夢さん、この槍をしばらく私が預かっていてもよろしいでしょうか？」
霊「いいわよ。むしろそんな気味の悪い槍なんて預かりたくないわ」
シ「ありがとうございます」

シエラは槍を布で包み、懐にいれた。さらにもう一つ、頼みがあると彼女は言う。

シ「もう一つ、彼をしばらく保護してもらえないでしょうか？本来であれば私たちが彼を保護するべきなのですが、今亜人種の中で問題が起こってまして……どうしても彼を保護できる余力がないんです」
咲「その問題って、序列上位者を襲撃する謎の集団のことですか？」

咲夜の言葉にシエラは目を見開いた。まさか人間である彼女がそのことを知っているとは思わなかったのだろう。無論何も知らない霊夢は首をかしげているが。

咲「二週間前、お嬢様のお師匠様から〝謎の紋章がついた集団が序列上位者を襲撃する事件がここ最近絶えない〟と話されまして、それで知りました」
シ「そうですか……はい、咲夜さんの言う通りです。今私たちはその事件を解決することに必死なんです。というのも、一昨日あの人がやられてしまったという情報が入ってから、今大混乱が起きてしまっているんです」
咲「あの人……とは？」
シ「亜人種序列４位、鬼の橘（たちばなかりん）花凛さんです」

咲夜は驚きを通り越して恐怖を感じた。亜人種は軽く数えても数百以上の種族が存在しており、それらの人数は億を超えるだろう。その中でも4位という超上位序列者、更に戦闘においては高いセンスを持つとされる鬼が、その集団によりやられた。亜人種の間で混乱が起きてしまうのも当然だろう。

シ「不意打ちだったということもあるらしいのですが、それでもあの人がやられたということは相当危険な集団だと思われます。なので、序列上位者である彼を保護する必要があるのです」

霊「えーっと……半分以上何言ってるのかわかんなかったけど、要するに彼を保護しないとまずいってことね」

シ「はい、その通りです」

霊「ふーん。じゃあ咲夜頼んだわ」

咲「はい？」

急に話を振られた咲夜は間の抜けた声を出してしまう。霊夢は笑いながら続けた。

霊「あんたのとこの豪邸なら空き部屋の一つや二つあるでしょ？私には誰かを養えるほどのお金も部屋もないし、一応あそこはこの幻想郷で一番重要な場所よ。すぐにばれるわ」

咲「確かにそうでしょうけど……一度お嬢様に聞いてからじゃないと」

レ「もう聞いてるわ」

突然の彼女の声に三人は驚く。見ると、レミリアが青年の枕元近くに立っていた。

咲「お、お嬢様☒いつのまに、というかなぜここに？」

レ「咲夜が酒屋で何かに遭遇する運命が見えてね、気になって来てみたのよ」

言われて咲夜ははっとなった。そうだ、お嬢様の能力は【運命を操る程度の能力】、つまりある程度の未来予知ができる。それでここに来たのか、と彼女は納得した。

シ「あなたがレミリアさんですね。初めまして、私はシエラ・リルダヴァルと申します」

レ「ご丁寧にありがとう。私はレミリア・スカーレット。大体の事情は把握したわ。こちらもちょうど彼を保護するために捜していたところだったの」

シ「そうだったんですか‼それじゃあ……」

レ「ええ……咲夜、彼を紅魔館に連れて行くわ。いいわね？」

咲「承知いたしました」

彼を引き取ることに決まったので、さっそく咲夜が彼を運ぼうとしたとき、その必要はないとシエラが言った。

シ「私の能力で彼を皆さんと一緒に紅魔館に直接転移させます。そちらのほうが、安全かと」

レ「そんなことができるの？ならそうさせてもらおうかしら。咲夜はどうする？」

咲「私は、徒歩で戻ります。まだ買い物の途中ですし、このあとアスナと一度合流することになっていますので」

レ「そう。周りにきをつけて帰ってきなさい」

咲「御意」

レミリアが周りに気をつけろと強調したのは、おそらく棟谷蓮を捜している奴らに感づかれたり、追跡されたりしないように帰ってこいという意味だろう。いつ、どこで奴らが見ているかわからないのだから。

シ「では、転移させますね」

そういうと、シエラは魔法陣を展開し、レミリアと彼を囲んだ。そして何やらつぶやき、一瞬で二人をどこかに飛ばした。ちなみに店主から借りた布団はそのままだ。

それを確認した咲夜も、それじゃと言って帰った。その場にシエラと霊夢しかいなくなった時、霊夢はシエラに気がかりなことを聞いた。

霊「シエラさん、さっきの彼が倒れる寸前に行ってた言葉、覚えてる？」

シ「〝博麗の巫女に伝えてくれ、もうすぐ戦争が起きる〟でしたよね」

霊「えぇ。あれ、どうも嫌な予感がしてならないの。普通戦争が起こるのなら、あなたみたいな人に言うべきよね。なんでわざわざ私に言いに来たんだろ」

シ「……これは、あくまで私の推測でしかないのですが、おそらく彼は、幻想郷を巻き込むほどの戦争が起こると言いたかったのではないでしょうか？」

霊「……だとしたら、あいつも絶対動くわね」

シ「おそらくは……こちらからもあの人に協力を要請しておきます」

霊「あんたからの要請は絶対きくわよあいつ。だってあなた、あいつの上司でしょ？」

シ「そうでしょうけど……」

霊「ま、とりあえずあいつは任せたわ。こっちはこっちで情報集めとくから」

シ「助かります、霊夢さん。ではまた」

シエラも能力でその場を去る。最後一人残った霊夢は、酒屋を立ち去ろうとしたとき、ふとあることを思い出した。

霊「そういえば、私あいつの名前聞いてないや」

To be continued……

四話

棟谷蓮を保護することになってから一か月が経つ。当の本人は未だに目覚める気配すらない。霊夢によれば息はしているらしいので死んでいるわけではないだろうが……

彼を保護した翌日、レミリアの予告通りキラが紅魔館に来た。何でもこの幻想郷に興味が沸いたらしく、知り合いを通じて暫くここに滞在することにしたという。

棟谷蓮を保護したことをレミリアがキラに伝えると、キラは『尚更ここにいないとダメになったね』と紅魔館に暫く泊まることにしたらしい。ちなみに弟のレグルスは何をしているのか咲夜が聞いたところ、『例の集団について会議を開いている』と答えていた。

話を戻そう。

一か月たってもなお意識が戻らない彼を見て、咲夜は少し心配になっていた。

咲「……」

ふと、咲夜はレミリアの言葉を思い出した。

ーー『人間を愛しすぎた堕天使よ』ーー

人間を愛しすぎた堕天使……その言葉を聞いた時、咲夜は初めて他人である彼のことが気になった。性格上他人のことをほとんど気にしない彼女にとって、それは大きな変化ともいえた。彼女自身、なぜそう思ったのかは全く分かっていない。ただ、無性に彼に会ってみたいという思いが少しながらもあった、としか言いようがなかった。

咲夜は掛布団の上に置かれた彼の手を見た。とても優しそうな手だ。その手に咲夜は無意識で触れた。

と同時に、咲夜に何かが流れ込んだ。

咲「っ⊠」

一瞬のことすぎて何が起こったのか全く分からなかった。一体何だったのだろうかと咲夜が疑問に思ったその時、

蓮「……っ」

蓮が目を覚ました。咲夜は慌てて手を引っ込め、何事もなかったかのように装った。

咲「あら、やっとお目覚めかしら」

蓮「ここ……は？」

咲「紅魔館よ。あなた、重傷のまま酒屋で倒れたのよ」

蓮「紅魔館……」

ゆっくりと体を起こし、彼は辺りを見渡した。その目はまるで、見た物すべてが未知の物と思って見ているようだった。そして包帯だらけの自分を確認した後、咲夜に目を向けた。

蓮「あなたは……？」

咲「私は十六夜咲夜、ここ紅魔館でメイド長をしてるわ。あなたは？」

蓮「僕は棟谷蓮です。助けてくださり、ありがとうございます咲夜さん」

咲「礼ならお嬢様に言って。後、私に敬語は使わなくていいわ。普通に咲夜って呼んで」

蓮「……わかった」

お互い軽く自己紹介を済ませ、咲夜は蓮の包帯を取った。一か月前まではボロボロだった体も完全に回復しており、腹部を貫いていた槍の穴も今ではどこに刺さっていたのかわからないほどにまで再生していた。ベッドから降りると、彼は羽が飛び散らない程度に背中の翼

をめいいっぱい広げ、背筋をぐーんと伸ばした。

蓮「んー……ふぅ、久々に羽を広げた気がするよ」

咲「そう。その状態なら大丈夫そうね。起きてさっそく悪いのだけど、今から私についてきて。あなたが目覚めたら部屋に連れてきてって言われてるの」

蓮「わかった、行こう」

体が大丈夫そうなのを確認すると、咲夜は彼を連れてレミリアの部屋に向かった。

ーーーーーーーーーーーーー

咲夜が連れてきたのは、真っ赤に染まった大きな扉のある部屋だった。個人の部屋としては大きすぎないか、というのが蓮の第一印象だった。

咲「お嬢様、咲夜です。棟谷蓮が目覚めましたので、連れてまいりました」

レ「わかってる。入って」

咲「失礼します」

ノックして扉を開ける。その先には一人の少女と一人の青年が、ティーセットが置かれたテーブルを挟んで座っていた。二人とも背中から蝙蝠の羽が生えているのを見た蓮は、彼女達が吸血鬼だと直ぐに理解した。

蓮「……吸血鬼、ですか」

レ「ええ、そうよ。でも安心しなさい、別にとって食おうなんて思ってないから」

蓮「それを聞いて安心しました。えっと……」

レ「レミリア・スカーレットよ。レミリアでいいわ。そしてこちらにいるのが」
キ「キラ・グランドレッド。以後よろしく」
蓮「棟谷蓮と言います。助けてくださり、ありがとうございました」
レ「どういたしまして、といっても殆ど咲夜がやったんだけどね。あと、そんなに堅くならなくていいわ」
蓮「わかりました、じゃなくて、わかった」
キ「素直でよろしい、と。とりあえず空いている席に座って。色々聞きたいことがあるし。咲夜ちゃんも座りなよ」

お互い軽く自己紹介をした後、蓮と咲夜は空いている席に座った。すると早速、レミリアが質問を始めた。

レ「早速だけど質問よ。まず、あなたが眠ったときかなりの極限状態だったの、覚えてる？」
蓮「うん、少なくとも意識がかなり薄れていたことぐらいは」
キ「じゃあさ、その間の記憶ってまだ覚えてる？」
蓮「その間の記憶……ごめん、覚えてない」
キ「そう、まぁ仕方ないか。あの状態が三週間も続いてたらしいし、覚えていたほうがおかしいか。後その様子だと、なんであの状態になったのかも覚えてなさそうだね」
蓮「うん、本当にごめん」
キ「気にすんなって。それじゃこの質問は終わり。次の質問だけど、蓮君はなんで狙われているんだい？」
蓮「それは多分、これが原因だと思う」

蓮は自分の翼に指をさした。光沢のある真っ黒の大きな翼だ。この翼には特殊な能力があると蓮は言う。

蓮「僕の翼の羽には特殊な力があってね、一枚一枚にとても高い治癒能力があるんだ」

レ「治癒能力？それって、どのぐらいなの？」
蓮「一枚で四肢全部再生できるぐらいかな」

予想以上の能力の高さに、三人は驚いた。
レミリアは最初、腕一本ぐらい再生するだろうと思っていた。しかし、彼は一枚だけで四肢、つまり両手両足を完全に再生できると言った。これには驚かざるを得ないだろう。
しかしここで、咲夜はある矛盾に気付いた。初めて会った時、彼は極限状態だった。だが咲夜は、その時彼の翼にはまだ羽が残っていたのをはっきりと覚えていた。高い治癒能力があるのなら、それを使って自分を治すこともできたんじゃないか、と彼女は思った。

咲「ねえ、あなた倒れる寸前もまだ羽があったわよね。なんで使わなかったの？あれを使えば、傷だって治せたはず……」
蓮「あぁ……あれは使わないんじゃない。使えないんだ。確かにさっきも言ったように、僕の羽には高い治癒能力がある。けれど、これは一種の呪いのようなもので、自分以外の人間や亜人にしか効果を発揮しない、つまり自分のためには使えないんだ。だから、自分が致命傷を負ったとしても、治せないんだ」
咲「そう……かなり不便な能力ね」
蓮「まぁ、都合の良すぎる能力はないってことだよ」
咲「確かにそうね。私は時間を止めることはできるけど……」
蓮「時間を止めれるの？」
咲「ええ。でもいつまでも止めていられるわけじゃないし、止めるのにも結構体力を使うから」
蓮「そっか」
キ「はいはい、そこまで。会話が弾むのはいいけど、それは後で」

話が逸れかけていたのをキラが戻す。一回咳払いをした後、キラはまた質問を始めた。

キ「あー、それじゃあ次の質問。これは咲夜ちゃんから聞いた話なんだけど、蓮君は倒れる寸前、『博麗の巫女に伝えてくれ。もうすぐ戦争が起こる』って言ったそうだね。あれは、どういう意味なのかな？」

蓮「戦……争……？」

キ「もしかして、覚えてない？」

蓮「……はい」

キ「そっか……じゃあさ、君を狙っている集団のことについて、何か覚えてる？」

蓮「集団……クレイドルのことか」

蓮の口から出た単語に、キラは興味深そうに彼を見た。

キ「クレイドル……揺りかご、か。それがあの集団の名前だね」

蓮「そう。何を目的に動いているのかはわからない。ただ、序列上位者を集団で襲撃するとか、やってることはめちゃくちゃだよ」

キ「ふーん。ちなみになんでそれを知っているんだい？」

蓮「それは……あれ、なんでだろう？」

自分の言葉に疑問を持ち始めた蓮。レミリアは、『極限状態が続いたせいでいくつか記憶がなくなっているのだろう』と結論付けた。

蓮「本当にごめん、役に立てなくて」

キ「いやいや、そんなことはない。こちらとしては何の情報もなくて困っていたところだからね。集団の名前がわかっただけでも十分だよ。さて……とりあえず俺からの質問はここまで。レミリアからは何かある？」

レ「そうですね……じゃあ最後に。蓮、あなたはこれからどうするの？」

蓮「これから、か。何にも考えてない」

レ「そんなことだろうと思ったわ。まず、あなたのことは私達が保護することになっているの。本来保護すべき上層部が今混乱状態ら

しくてね」

そこで、とレミリアは紅茶の入ったカップを手に、笑みを浮かべながら提案した。

レ「あなた、いっそのことここに住まない？こんな大きな屋敷、一人増えたところで問題はないわ。それに、私自身あなたのこともっと知りたいしね」

蓮「そう。でもいいのか？僕を狙って誰かがここを襲う可能性だってないわけじゃないし」

レ「そんな奴ら、全員返り討ちにしてやるわ。それに、誰もタダで住ませるなんて言ってないし」

蓮「……あぁ、なるほど。それで、僕は何をしたらいい？」

レ「あなたには執事になってもらうわ。主な仕事は、咲夜の手伝い。一応妖精メイドはたくさんいるのだけど、全員をまとめるのは咲夜一人じゃ大変なのよ。あともう一人頼れる子はいるのだけど、おっちょこちょいでね。咲夜はどうかしら？」

咲「私は特に大変だとは思ってはいませんが……しかし、手伝ってくれる方が増えるのは嬉しいですね」

レ「だ、そうよ。どうかしら？」

蓮「もちろん、そうさせてもらうよ。いや、執事だから、そのようにさせていただきます、かな？」

レ「無理に敬語を使わなくていいわよ。わかったわ。キラさんもいいですよね？」

キ「俺はいいよ。上層部にもそう伝えとく」

レ「と、いうわけだから、これからよろしくね」

蓮「うん、よろしくね」

こうして蓮は紅魔館の執事となり、レミリアのもと保護されつつ紅魔館に住むことになった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

～???～

真っ黒な空間

見渡す限り何もない空間

その空間に一人、目をつむったまま剣を振るう男がいた。

？「……」

青色の髪に青のジャケット、黒のズボンに黒のローファーの目の蒼い青年だ。

青年が無言で振るうその剣術には、一切の無駄がなかった。

ふと、ピタリと動きが止まる。ゆっくりと瞼を開きながら、青年は背後から感じる殺気に声をかけた。

？「……邪魔をするな」

？「あはは、やっぱ気づいちゃった？」

言葉とともに、一人の少女が現れる。

背中を覆うほどに伸びた白い髪に、露出の多いシャツに黒スカートの不敵な笑みを浮かべる少女だ。その少女から放たれる殺気は、尋常ではない。

？「それで、何の用だ」

？「相変わらずぶっきらぼうね」

？「鍛錬を再開したいんだ。さっさと要件を言え」

？「はいはい。話ってのは、ターゲットの居場所が分かったんだよ」

？「ターゲット……あぁ、あの堕天使か」

？「そうそう。確か……ゲンソーキョー？ってところにいるみたい」

？「ゲンソーキョー……幻想郷、か」

？「あら、知ってるの？」
？「あぁ、俺は一度あそこの管理者とあったことがあるからな」
？「へぇ。なら話は早いわ。御方からの指令よ。今から幻想郷に行って、ターゲットを捕獲して」
？「承知した。全てはクレイドルのために」

青年はその場を去る。その姿を見た彼女は、あの不気味なマークの入った舌を出して、再び不敵に笑った。

？「覚悟なさい、棟谷蓮。あなたの命日は……すぐそこよ」

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…

五話

その翌朝、紅魔館の誰よりも早く起きた咲夜は、思いっきり部屋の窓を開けた。

雲一つない晴天の空。朝を教えてくれる小鳥たちのさえずり。それらはまだ目覚めていない咲夜の脳を起こすのには十分だった。

背筋を伸ばし、今日も一日頑張ろうと気合を入れた時、

咲「……？」

何かの音が咲夜の耳に入ってきた。耳を立ててみると、どうやら上の方、紅魔館の屋上から聞こえるようだ。

侵入者の可能性があると感じた咲夜は、パジャマ姿のまま自前のナイフを持ち、静かに屋上へ向かった。

屋上に近づくにつれ、その音は人の歌声のようだと分かった。屋上の扉に着いた咲夜は深呼吸し、ゆっくりと扉を開けた。そして扉の隙間から確認してみたところ、

咲「あれは……蓮？」

そこには体を大きく動かしながら歌う蓮の姿が見えた。どうやら彼の歌声らしい。

侵入者ではないと安心した咲夜はナイフをしまい、屋上で歌う彼の声を静かに聞いた。

咲「……綺麗」

それだけ、否、それしか言葉が出なかった。

男性的な声とも、女性的な声ともとれる、中性的で優しさのある素直な歌声。今まで聞いたことのないその綺麗な声に、咲夜は魅了された。

彼がプロの歌手であることは覚えていたが、彼の歌は咲夜の想像を遥かに超えていた。
しばらくして、歌い終わったのか満足気な顔をした蓮に、咲夜は拍手しながら近づいた。

咲「あんな綺麗な歌声、初めて聞いた。凄いじゃない」
蓮「咲夜……いつからそこにいたの？」
咲「ついさっき。起きてすぐ窓を開けたらあなたの声が聞こえてね、気になって来てみたのよ」
蓮「そっか」

途端、二人の腹の虫が鳴る。お互いのちょっと間抜けな音に思わず笑いあう。

蓮「ハハハ、今同時になったね」
咲「そうね、フフッ。それじゃあ朝食の準備しましょうか。私は一回部屋に戻って着替えてくるから、先に厨房に行ってて」
蓮「わかった」

そう言って咲夜は自室に戻り、いつものメイド服に着替えた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

朝食後、蓮と咲夜はレミリアに呼ばれ、紅魔館の大広間に来ていた。

レ「改めて自己紹介よ。私はレミリア・スカーレット。この紅魔館の主よ。今日からあなたはここで執事として働くことになるのだけど……まぁ上下関係とかはあまり気にせず、気楽に話してくれると嬉しいわ」
蓮「あ、はい。よろしくお願いします……じゃなくて、よろしく？」

レ「無理にする必要はないわ。話しやすいように話して。さて……早速仕事をして、と言いたいところなのだけど、その前に言い忘れていたことがあってね。蓮は、〝弾幕ごっこ〟って知ってるかしら？」

蓮「弾幕ごっこ？いや、知らない」

レ「〝弾幕ごっこ〟というのは、この世界……幻想郷における決闘ルールよ」

蓮「へぇ。それで、その弾幕ごっこって一体どんなの？」

レ「そうね……説明するより実際に見たほうがいいわね。キラさん、相手してもらってもいいですか？」

天井を見上げてこの場にいない人物の名を呼ぶレミリア。どういうことかと疑問に思った二人が見上げると、天井に誰かがぶら下がっているのが見えた。おそらくキラだ。キラはそこから勢いよく落下し、床にぶつかる寸前で綺麗な着地を決めた。

キ「いいよ。チュートリアルみたいなものだし、スペルカードは一枚でいいかな？」

レ「それでお願いします。それじゃあ二人は離れてて」

そうしてキラとレミリアが向かい合う。その二人から蓮と咲夜は距離を取った。

レ「それじゃいきますよ！」

開始の合図をしたのと同時にレミリアはキラに向けて真っ赤なエネルギーの弾を大量に放った。その弾幕をキラは迷うことなく華麗に避け、同じく青いレーザーをレミリアに放った。

開始早々、蓮はその弾幕の打ち合いに圧倒された。

しばらくすると、レミリアは懐から弾幕の絵柄が入ったカードを取り出した。

レ「スペル発動、『スカーレットシュート』！」

何かを宣言した直後、レミリアが放ったのは先ほどの弾幕とは比にならないほどの大量の弾幕だ。しかもそれはただの弾幕ではなく、少し規則性のある弾幕だった。

これが弾幕ごっこの一番の特徴、スペルカードである。スペルカードは通常の弾幕とは異なり、弾幕の量が凄まじく、美しく、規則性があるのが特徴だ。

レミリアから放たれる尋常じゃないスペルカードの弾幕がキラに迫り、当たる直前、

キ「まだまだ遅いね」

目をつむった状態ですべて避けた。

これには蓮だけではなく、咲夜も驚いた。更に二人を驚かせたのは、彼が後ろ向きに避けていることだ。

それを見たレミリアは自分の師匠の恐ろしさを改めて感じた。

スペルカードの効果が切れたのを確認したキラはレミリアに振り向いた。

レ「さすがは私の師匠ですね。当たる気がしませんよ」

キ「それはどうも。さて、ではこちらも行かせてもらうよ。スペル発動『グングニルレインズ』」

次はキラがカードを取り出し、宣言する。するとレミリアの頭上に魔法陣が展開され、槍の形をした弾幕が雨のように降り注いだ。速度はそこまでなく、まるで『当てる気は全くありません』ともとれる簡単な弾幕に見えた。

弾幕をたやすく避け、一気にキラに近づく。勝てる、と彼女は一瞬だけ思った。

それが、彼女に大きな隙を与えてしまった。

キ「知ってる、レミリア？雨ってさ……地面に落ちると水しぶきをあげるんだ」

レ「⊠しまっ……」

キラが放った槍は床に当たり、それと同時に大量の弾幕をまき散らした。大きなものから小さいものまで、大きさがバラバラのエネルギー玉が四方八方に飛び、レミリアに迫った。完全に油断していたレミリアはそれに対応することができず、被弾してしまった。

それによりレミリアの負けが決定し、二人の弾幕ごっこは終わった。被弾してしまったレミリアは残念そうな顔をしながら床に降りてきた。

レ「あーあ、今度こそ勝てると思ったのですけどねー」

キ「まだまだ、ってことさ」

レ「というか師匠、弾幕ごっこになれるの早すぎますよね？説明したの、一昨日ですよ！」

キ「それだけレミリアの説明が上手だったってことさ。それに、君の妹が相手してくれたんだ。上達しないほうがおかしいでしょ？」

レ「だとしてもです！」

キ「まぁまぁ、次があるさ。今日の失敗を糧に、頑張りたまえ（なでなで）」

レ「子供みたくなでるな！」

蓮・咲『……何、この親子喧嘩』

喧嘩する二人（といっても、ただレミリアが一方的に言っているのをキラがなだめているだけだが）を見て、蓮と咲夜は思わずツッコミを入れた。すると同時に、咲夜は何か不思議な感覚を感じた。

咲「（……？何だろう、この感覚……まるで、過去にもこ

んなことがあったような……）」

咲夜が感じたのは、世に言う既視感という感覚だ。

実は彼女、十六夜咲夜は、過去の記憶……特に幼少期の記憶をはっきりと憶えていない。そのため、自分の生年月日、家族、更には自分の本当の名前でさえ知らない。現在ある名前は、レミリアが初めて彼女と出会った日が満月の翌日、すなわち十六夜の月で、昨夜ならもっときれいな月の夜に出会えたのにということから、昨夜を咲夜ともじりつけられた名前であり、実名ではない。尤も、自分に名前があったのかさえも憶えていないが。

蓮「……や……くや……咲夜！」

咲「っ☒な、何？」

蓮「どうしたの？何か考え込んでたみたいだけど」

咲「だ、大丈夫！ただちょっとボーっとしてただけだから」

蓮「ふーん……あ、喧嘩終わったみたい。行こうか」

咲「え、ええ、そうしましょう」

ちょうどレミリアとキラの親子喧嘩？が終わったらしく、蓮と一緒に咲夜は二人の所へ向かった。その光景にも、咲夜はまた既視感を覚えた。しかし考えても仕方がないと思い、あまり気にしないようにした。

キ「いやー、ごめんごめん。待たせちゃったかな？」

蓮「僕は大丈夫。そっちはもう済んだの？」

キ「まあね。レミリアがこうやって色々言ってくるのはもう慣れたし」

レ「ちょっとキラさん☒それじゃまるで私がいつもキラさんに文句言ってるみたいじゃないですか！」

キ「事実じゃん。まぁ、それは置いといて、だ。弾幕ごっこを見た感想は？」

蓮「えっと、とりあえず綺麗だった。それと、楽しそうだった」
キ「そう思ってくれたのなら幸いだね。弾幕ごっこは何より、綺麗かつ楽しいゲームなんだから。それじゃ今から詳しい説明をするから、ホワイトボードとペンを……」

と、キラが説明を始めようとしたその時、大広間の扉が勢いよく開き、アスナが飛び込んできた。

レ「どうしたのアスナ、そんなに慌てて？」
ア「ぜぇ……ぜぇ……お、お嬢様どギラざま宛にぞくだづでございまず……」

急ぎすぎて息が切れかけているからか、ろれつがほとんど回っていない彼女は何とかその封筒をレミリアに渡す。書き手の名はR・G・となっていた。

レ「これは……レグルスさん？」

早速中身を確認すると、一通の手紙が入っていた。二人は内容に目を通す。そして、青ざめた。

レ「〝蓮のことを報告するため今すぐ二人で来い〟……ですって。これ、完全に怒ってますよ」
キ「だよねー、じゃあ急がないと！あーっと、ごめん。急用ができちゃったみたいだ。弾幕ごっこについてはまた後で話すからさ、蓮君は咲夜ちゃんに幻想郷を案内してもらいなよ、うんそれが良い。本当は色々教えたかったけど、あいつ時間に厳しいから遅れると色々厄介なんだよね、ハハハ。んじゃそういうわけで二人ともよろしく、夜にはちゃんと帰ってくるから！」

咲夜が質問する間もなく、風のように二人は大広間の窓から飛び出

し、全速力でどこかに向かった。急な展開に蓮と咲夜はついていけず、途中から放心状態になっていた。

数十秒後、やっと咲夜が口を開いた。

咲「……それじゃあまず、紅魔館の住人から紹介するわ。アスナもいいわね」

ア「あ……はい」

蓮「……うん、よろしく」

To Be continued…

六話

～紅魔館・廊下～

咲「なんか……凄かったわね、さっきの」

ア「はい……私もあんなに慌てるキラ様とレミリア様は初めて見ました……」

蓮「いつもはあんな感じじゃないんだよね？」

咲「え、ええ。普段はもっと冷静で、慌てることはほとんどないのだけど……」

ア「それほど怖いのでしょうか……レグルス様の怒りは」

蓮「かもね……」

弾幕ごっこを教えようとしたキラとレミリアが、レグルスからの怒りの手紙を受け取り、青ざめた表情で飛び出して行った後、咲夜はアスナと共に、蓮に紅魔館を案内していた。

蓮「そういえば、自己紹介がまだだったね。僕は棟谷蓮、今日からこの紅魔館で執事をすることになったんだ」

ア「あ、そうだったんですか。私はアスナと申します。これからよろしくお願いします」

咲「この子は私の一番信頼できる後輩で、今はメイド長代理を務めているの。だから関係でいえば、蓮の上司に当たるわね」

蓮「えっ、そうなの？」

ア「は、はい！あ、でも敬語とか気にしなくて構いませんから！」

蓮「そっか、わかったよ」

咲「さて、二人の自己紹介が済んだところで……着いたわ」

咲夜が立ち止まったのは、大広間の扉より一回り小さい紫色の扉の前。咲夜が扉を三回ほどノックすると、中から黒いワンピースのような服を着た赤髪の女性が現れた。

？「はいはーい。あっ、咲夜さん！それにアスナさんも！」
咲「こんにちわ、こぁ。パチュリー様はいらっしゃるかしら？」
？「はい、いらっしゃいますよ」

こぁ、と呼ばれる女性は、パチュリーという人物の元へと案内した。その際部屋に入った蓮は、目を丸くした。
部屋全てが、本と本棚で埋め尽くされていた。視認しただけでも１０００冊以上はある。

？「ところで咲夜さん、そちらの黒い翼を生やした方は？」
咲「今日から執事になる新人よ。名前は……」
？「あれ？ちょっと待ってください。そのお顔……もしかして、棟谷蓮様ですか☒二ヶ月ほど前から行方不明になったとされる、亜人種序列１８０位の堕天使の！」
蓮「う、うん。そうだよ」
？「職業は作詞作曲も手がけるプロのシンガーソングライターで、ファンクラブ会員数５万人以上！音楽を知る者の間では知らないものはいないとされる、あの超超超有名人、棟谷蓮様ですか！」
咲「こぁ……貴方、彼を知ってるの？」
？「当たり前ですよ！だってほら！」

蓮の名前を聞いた瞬間テンションが上がり始めた彼女は、服のポケットから何かを取り出し３人に見せた。何かのカードのようだ。アスナがそれを読み上げる。

ア「『棟谷蓮ファンクラブ・会員Ｎｏ．００００７・会員名：小悪魔（こぁ）』……って、これファンクラブカードじゃないですか！しかも一桁☒」
蓮「なるほど……君は僕のファン、ってことなんだね」
小「はい！キャーー、どうしよう！まさかあの棟谷蓮様にこんなところで会えるなんて！あ、あの、サインもらえませんか！それが無理

ならせめて握手だけでも！いや、それよりも行方不明になってから大丈夫でしたか？お怪我はありませんでしたか？蓮様が姿を消されてからの毎日がとてもとても心配で！」

？「うるさいわね、こぁ」

凄い勢いで話すこぁの後ろから、新たな人影が現れる。長い紫髪の先を赤と青のリボンでまとめ、薄紫色のゆったりとしたパジャマのような服を着ている。ドアキャップのような薄紫の帽子に三日月のような飾りをつけている。

？「ここは図書館、静かにする場所よ。司書でもある貴方が大声出してどうするの」

小「も、申し訳ありませんでした、パチュリー様」

パ「全く……それで、貴方が棟谷蓮？」

蓮「あ、はい。僕のことを知っているのですか？」

パ「ある程度はレミィ……あぁ、レミィというのはレミリアのことね。彼女から聞いてるわ。それに、さっきこぁが大声で名前を呼んでいたし、いやでもわかるわ」

小「うっ……」

パ「……まぁ、この話はこれぐらいにして。私はパチュリー・ノーレッジ。パチュリーでいいわ。このヴワル図書館の管理人をしている魔法使いよ」

蓮「魔法使い？ということは人間？」

パ「元々はね。今は魔法で特殊な身体になってるから、一応亜人。といっても、寿命が長くなったのと食事を必要としなくなった、ぐらいしか違いはないけど」

蓮「そうなんですか」

パ「ええ。ところで、レミィとキラは？」

ア「お二人は先程、レグルス様から召集の手紙を受け取った後、風のように何処かへ行ってしまわれました。何でも、レグルス様がお怒りだと思われたらしくて」

パ「……成る程ね。あのレグルスが怒っているのなら、急ぐのは当然かしら」
咲「パチュリー様は、お嬢様方がお急ぎになられた理由が分かるのですか？」
パ「ええ。ていうか、咲夜はキラから説明を受けなかった？」
咲「えーっと、はい」
パ「あ、そう。まぁ、いいわ。そのうち分かると思うし」
咲「そのうち……ですか……」
パ「ええ、そのうちね……それにしても」

パチュリーは何か不思議なものを見るような目で蓮の周りをぐるぐると回り始めた。特に彼の翼に興味があるらしく、突いたり広げたりなどした。

パ「へぇ、堕天使の翼って黒いのねぇ。堕天使といえば白色で片翼が無いのが一般的だと思ってたのだけど。これが普通でいいのかしら？」
蓮「まぁ、そうだね。もちろん片翼が無い堕天使も一応いるけど」
パ「ふーん。片翼が無い堕天使と、黒い翼の堕天使にはどういう違いがあるの？」
蓮「えっと。まず片翼が無い堕天使だけど、これは大罪の証、つまり天使の掟を破ったものに与えられる罰を示しているんだ。大罪には色々あるんだけど、一番わかりやすいのは人間の殺害だね。天使は人間を厄災から守護するのが主な役目。だから、その守るべき対象を傷つけるのは絶対に駄目なんだ。ちなみに僕達天使族の翼は神の名を持つもの以外消し去ることもできないから、先の戦いで失くした、なんてことはない」
パ「つまり、片翼が無い＝大罪人だとすぐに見分けがつく訳ね」
蓮「そうだよ。次に黒い翼の堕天使についてだけど、これは天使の任を解くための試練に合格した者に見られる、自由の証なんだ」
パ「自由の証？」

蓮「そう。試練というのは、天使として生を受けたもの全員に課せられるもので、この黒い翼はその試験に合格し、天使としての任を解かれ自由に行動することができることを示すんだ。だから、この黒い翼は、天使族の憧れでもあるんだ」

蓮の説明に納得するパチュリー。すると、その場で手を挙げる者がいた。意外にも、アスナだった。アスナは蓮に質問する。

ア「あの、あの！蓮さんの説明によれば、蓮さんのような堕天使はいい人なんですよね？なのに、なぜ大罪を犯した天使も同じように〝堕天使〟と言われるのですか？」

蓮「『地上に〝堕〟ちた〝天使〟』と表現されるからだよ。片翼が無い大罪人の天使はその罪を償わせるために地上に堕とされる。同時に黒い翼を持つ優秀な天使は自ら地上に堕ちる。こういう理由で僕のような天使も堕天使と言われるんだ」

ア「そ、そうなんですか。なんか、強引ですね」

蓮「まぁ、そこは暗黙の了解ってことで」

ア「あ、はい」

まだ納得したわけではないようだが、それ以上アスナは質問をしなかった。そしてそろそろ違う場所に行こうとした時、パチュリーが彼に話しかけた。

パ「そういえば貴方、弾幕ごっこは知ってるかしら？」

蓮「はい、先程キラさんとレミリアさんがしていたのを見ました」

パ「見た、てことは、実際にはまだしたことはないってことね」

蓮「そうなりますね」

パ「ふーん。だったら、今ここで私と一回やってみたらどうかしら？」

咲「えっ⊠パチュリー様が⊠」

まさか自分から弾幕ごっこしたいと言うとは思わなかった咲夜はびっくりして目を丸くした。
実はパチュリーはとても病弱で体力がなく、あまり激しい運動は好まない。そのため、弾幕ごっこをすることが滅多にない。なのに今回、蓮に自分から弾幕ごっこをしようと持ちかけたことに、咲夜は驚きを隠せなかった。

小「へぇ、いつもは図書館で弾幕ごっこしないひ弱なパチュリー様が珍しい」
パ「一言多いわよ、こぁ。……まぁ、いいわ。それで、どうかしら？」
蓮「僕は、構いませんよ。ですが、どうして？」
パ「堕天使である貴方の動きを観察したいってのも理由なんだけどね。実はレミィから貴方の相手をするように頼まれたのよ」
蓮「なるほど……分かりました」
パ「それじゃ、早速……と、言いたいところだけど、貴方スペルカード作ってないわよね？時間あげるから、最低でも二枚作って。咲夜も手伝ってあげて」
咲「分かりました」
蓮「すぐ作ってきます」
蓮は近くにあったテーブルに座り、咲夜と一緒にスペルカードの作成に取り掛かった。その様子を見ながら、パチュリーはいつのまにか小悪魔が持ってきていた紅茶を飲んだ。
Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…

七話

咲「さてと……蓮はどんな戦い方をするのかしら」

パチュリーが蓮に弾幕ごっこを申し込んでから約３０分後、彼のスペルカード作成を手伝った咲夜は近くの椅子に座り二人の戦闘が始まるのを待っていた。ちなみにアスナはある二人を呼びに図書館を出ている。

咲「……それにしても」

咲夜は蓮にスペルカードの作り方を教えた際感じた既視感に再び疑問を抱いた。

咲夜が蓮と初めて会話したのは昨日だ。しかし、少しぐらいは感じるはずのぎこちなさを彼女は感じたことがない。むしろ、懐かしい友達と会話をしているような気楽な気分になる。一体何故――

ア「――お待たせしました、咲夜メイド長！」

突然後ろから声をかけられる。振り向くとアスナが、二人ほどの女性を連れて来ていた。片方は背が高く、緑色のチャイナドレスを思わせる服を着た赤髪の女性。もう片方はレミリアにとても似ている、背中から七色の水晶を垂らした枝状の翼を生やした金髪の少女だ。

ア「美鈴さんとフランお嬢様をお呼びいたしました」

美「お疲れ様です、咲夜さん」

咲「お疲れ様、美玲」

フ「ねぇねぇ、咲夜！弾幕ごっこはいつ始まるの？」

咲「もうすぐですよ、妹様」

また時間があるときに考えよう……そう思いながら、咲夜はパ

チュリーと蓮が立っている場所を見た。
ーーーーーーーーーーーー
パ「準備はいいかしら？」
蓮「いつでも……と言いたいけど一つ確認。弾幕ごっこの勝敗条件は？」
パ「相手を再起不能にすれば勝ち。されたら負け。簡単でしょ？」
蓮「スペルカードの枚数は？」
パ「制限なしで行きましょ」
蓮「なるほど……わかった」
パ「それじゃ、始めましょうか」

パチュリーは浮遊魔法を唱え飛ぶ準備をする。蓮は翼を大きく広げ、いつでも飛べる構えになっていた。

パ「（亜人種序列１８０位、堕天使・棟谷蓮……弾幕ごっこを知らないとはいえ、油断はできない）そちらからどうぞ」
蓮「それじゃ、早速！スペルカード『レインズジャベリン』！」

初手でいきなりスペルカード宣言をした蓮。すると彼の姿が消える。
突然のことにパチュリーは驚き、辺りを見渡した。すると上空から気配を感じた彼女が上を向くと、そこには自分の身長の約３倍はあるだろう、青い光に包まれた長い槍を持つ蓮がいた。蓮はその槍を両手でクルクルと回し始め、パチュリーに向けた。
次の瞬間、その槍から無数の青いレーザーと小さな槍状の赤い弾幕が放たれ、パチュリーに降り注いだ。
当たる直前でなんとか回避した彼女は、転移魔法を使って彼の背後に回った。

パ「危なかった……初手にしては凄いスペルカードね」
蓮「転移魔法か……それは予想してなかった」

パ「伊達に魔法使いやってないわ」

とはいえ、真上を取られるとは思ってなかったパチュリーも彼の動きには驚いた。そして焦った。

いきなり相手の上を取るなんてこと。レミリアでもしたことがない。

パ「それにしても、いきなり相手の上をとってスペルカードを発動するなんて」

蓮「最初は不意打ちのつもりだったんだけどね。でも今のでわかったよ」

パ「あら、何がわかったのかしら？」

蓮「君の意表をつく攻撃は通用しないってことさ。お陰で、戦法が減った」

パ「へぇ、それはお気の毒様。お詫びに私から特大のスペルカードをくれてあげるわ。スペルカード『ロイヤルフレア』」

パチュリーが懐から取り出したのは、スペルカード『ロイヤルフレア』。発動と同時に巨大な火の玉が生成される。小型の太陽と例えられるそれは、蓮に向かって突っ込んだ。

蓮「うぉっと！」

またしても彼の姿が消える。そしてまた彼女は背後を取られる。

突っ込んだ火の玉は本棚にかけられた魔法の結界により吸収され、最小限の爆風で収まった。

再び二人が睨み合う。戦いは始まったばかりだ。

ーーーーーーーー

フ「凄ーい！あの蓮って人、今消えたよね！」

二人の弾幕ごっこを観戦するフランドールは興奮した。
彼女の中には、かつて霧雨魔理沙と戦った時のような高揚感があった。
そしてその高揚感は、咲夜にもあった。
咲「パチュリー様のロイヤルフレアを一瞬で避けるなんて、でも一体どうやって？彼も転移魔法を使ったのかしら？」
美「いえ、ただ移動しただけみたいです」
咲夜の疑問に美鈴が答える。その場にいた全員が驚く。
ア「え、移動しただけなんですか⊠」
美「はい。パチュリー様の上をとった際、一瞬彼の翼がブレたように見えたんです。それで彼の翼をよく観察していたら、ロイヤルフレアを避ける際その翼を一瞬だけ広げて、一回だけ羽ばたいていたんです。あの速度は多分、文屋の鴉天狗の手前か同等くらいかと」
咲「それを見れたっていうの？」
美「伊達に咲夜さんのナイフを受けてませんから」
どやぁ、と胸を張って言ってるが、そもそも咲夜のナイフを受けるのは職務怠慢によるものだということを自覚してほしいと咲夜は心で思った。けれど今回は口には出さないでおこう。彼の前であまりそういうことをして怒ることはしたくない。
咲「(彼の前で？)」
やはりおかしい。
ここ最近、彼のことを意識していることが明らかに多い。
事の発端は、キラから棟谷蓮の名前を聞いた時からだ。
あの時から妙に彼のことを気にしている。
彼が怪我から復活した時も、何故か心から安心したような気分にも

なった。お嬢様・妹様・パチュリー様・美鈴・こぁ・アスナを除き、自分以外の人物の心配をすることなど今まで一度もないのに。
ではなぜ彼のことをここまで意識してしまうのか？もしや私は彼のことを好いているのか？
しかしこの感覚が恋愛的なものかどうかと言われると違うように思える。
彼が好きというわけではない。
好きというより、懐かしいという感じだ。
彼と初めて会ったのはつい最近、だというのにまるで１０年以上会っていない古くからの友人に出会ったような、そんな気分になる。
だが、自分の記憶の中には彼の存在は無い、つまり会ったことなどないはずなのだ。
じゃあこの感情は一体なんだ？なんでこんなにも彼のことを……

美「咲夜さん？」
咲「っ☒な、何かしら？」
美「いえ、もうすぐパチュリー様と蓮さんの弾幕ごっこに決着がつきそうなので伝えようと」

はっとなって蓮とパチュリーを見ると、パチュリーがスペルカード『賢者の石』を発動して蓮を追い詰めていた。美鈴に詳しく聞いて見たところ、まず蓮がパチュリーの周りを高速で回りながら四方から弾幕を放った。そしてパチュリーは再び転移魔法を使って移動し、地上へ降りた。すると今度はパチュリーが攻撃を仕掛けるが、レミリア以上の圧倒的なスピードで避けられてしまう。しかし弾幕で徐々に彼を天井へと移動させていき、位置についたところでスペルカードを発動し、彼を弾幕の中に閉じ込めて今に至るという。
とりあえず今はこの戦いを見よう、そう思った。
ーーーーーー

蓮「なるほど、これは所謂袋のネズミ状態ってやつだね」

パ「自分が危機的状況にあるって分かっているのに、随分余裕そうだこと」
蓮「冗談はよして。これでも結構焦ってるから」
焦っているという言葉とは裏腹に、彼の表情からは落ち着きが見られる。
さすがは序列１８０位と言ったところか、肝が据わっている。
パ「それで、どうするの？降参する？」
蓮「まさか。降参なんてしないよ」
パ「じゃあ、どうするの？」
蓮「そうだね……」
前後左右上下全方向から弾幕が迫ってくる。
避けることは集中すれば出来るが、それだと攻撃ができない。
かといって攻撃しに行ったら、それこそパチュリーの思うつぼだ。
正直に言って、蓮はパチュリーのことを少し甘く見ていた。
魔法で自分の寿命を延ばせる魔法使いはそうそういない。だからこそ彼女がどれほど凄い魔法使いなのか理解していたつもりだったが……
蓮「（これはもう魔法使いってレベルじゃない……賢者、いや大賢者かそれ以上の実力！）」
彼女が操作している四つの結晶。それらは全て〝賢者の石〟と呼ばれている魔法の石。
上級の魔法使いでさえ一つを操るのがやっとともいわれているその石を、彼女は四つも同時に、それも正確に操作している。その時点で体内に保有する魔力・魔法の扱い方は桁違いだと理解できる。それでいて、尚疲れたような表情を見せないのは、もはや驚きを通り越して尊敬に値する。

蓮「(魔法だけの戦いだったら、今の僕は確実に負けていた)」

弾幕ごっこで良かったと、蓮は安心する。
いくら180位だからとはいえ、魔法が得意という訳ではない。簡単に言えば上の下ぐらいの実力。それに対し彼女は最上級。蓮が今まで見てきた魔法使いの中で、特に群を抜いて天才的だ。

蓮「(これはあくまで模擬戦のようなもの、負けたところで何ということは無い……けど)」

椅子に座っている咲夜に目線を向ける。
実は咲夜が感じている感情は、蓮も感じていた。
彼もまた、咲夜を古い友人のように思っていた。

蓮「(何でかわからないけど、彼女の前で負けるのは嫌だな……よし)スペルカード発動『ストライク・ランサー』」

懐から一枚のスペルカードを取り出し、発動する。
すると右手に持っていた光の槍が、持ち手の長いスピア状から矛先が長いランス状に変化し、さらにその矛先が凄まじく巨大化した。

パ「あら、大きな槍ね。でも、それをどうするのかしら?」
蓮「勿論……こうするんだよっ!」

槍先をパチュリーに向ける。そして大きく翼をはばたかせ、彼女に突進した。

パ「……え?」

まさかの力技に、パチュリーは一瞬困惑する。

その一瞬の隙を、蓮は見逃さなかった。
文字通り、蓮はパチュリーに突っ込んだ。
凄まじい爆発が発生する。
その爆風に、咲夜たちは吹き飛ばされそうになった。

ア「な、何ですかこれーーーーーーー!!!」
美「いきなり突っ込むなんて、どんなごり押し技ですか！」
咲「っ……」

長引くと思った戦闘は、ごり押しであっけなく終了した。
Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…